

高杉晋吾

生と死の差別構造

侵略



三書房

高杉晋吾

と死の差別構造

書房

たか すぎ しん ごと
高 杉 晋 吾

1933年 秋田市に生まれる

1957年 早稲田大学第一文学部卒業

現 在 フリーのルポライター

著 書 『現代日本の差別構造』『差別構造の解体へ』『頭脳支配』『部落差別と八鹿高校』『教育差別からの解放』『部落差別と冤罪』『死に急ぐ子どもたち』『地獄のゴングが鳴った』(以上三一書房) 他

現住所 埼玉県川越市仙波 3-32-43

生と死の差別構造

1983年 8月31日 第1版第1刷発行

著 者 高 杉 晋 吾

©1983年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 文栄印刷株式会社

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1~5 番

振 替 東 京 9-8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

目次

不可視の死——僕らの凍れる時代

5

戦争と死

宜昌の血と砂——証言・私は中国人四十一人を斬殺した

21

東支那海の惨劇——謎の大洋丸事件

47

戦中——戦後・過渡期の死

細菌戦部隊の戦争責任を追って——生きている七三一部隊

79

日常のなかの死

死のクリスマス・イヴ——十全会の断面

143

絶望の千葉教育の果て——流山高校長の自殺

177

三途の川を渡った女——大西山崩落記

209

装
丁

橋
本
勝

生と死の差別構造

不可視の死——僕らの凍れる時代

わが体験

「なぜこの本を書いたのですか？ この本は何を訴えたいのですか？」

私はこの本で、様々な日本の状況下での「死」を描いた。

例えば昨年（一九八二年）は、教科書における「侵略」の問題が噴出した。

私はこの本で、戦争下での日本人の殺しと死を描いた。どんなに戦時中における日本人の死を描いても、私には悲壮美に満ちた死は描けない。

私は取材しながらそう思った。私は、少年時代、戦争における死の一端を垣間見た。それは私と私の肉親の戦争体験（母と姉の死）私の被爆体験においてである。

しかし、私は私の肉親の死をふくむ戦争による日本人の死を悼む気持はあっても、美化する気にはなれない。

虚しさだけが私の中にふつつつとよみがえり、私を凍らせる。

あの時、幻の炎の中にいた。

しかし、あの時、私たちの親や兄弟姉妹たちは灼熱^{しゃくねつ}していた。子どもであった私の眼にはそのように見えた。

他国の民衆を殺すのを見ながら、熱をこめて殺りくを正義として容認し、その雰囲気の中で自らの生を燃しているように見えた。

だが、そのような中で青春を燃した人々が、今、他国の民衆から、己れが賭けた人生を「侵略」として全面否定される時、その胸の中に生じるだろう凍りついた虚しさは耐え難い恐怖なのではないか、と思う。

己れの人生のすべてを土台からゆすぶられ「お前の歩んだ道の大半の虚しさ」を指摘されることは、確かに年をとり、すでに人生のとり返しのきかない年齢の人々にとっては心も体も凍らせる耐え難い恐怖であるに違いない。

「だが……」と私は思う。

私たちの親や兄弟が刺突し、斬首した中国兵や民衆の中の失われた人生について、そして死の瞬間に彼らの胸によぎった母親や父親への思慕や様々な想いにくらべて、その恐怖は比較するも愚かな薄さと軽さを持っている。

教科書問題とは、教科書の文面の「侵略」か「進出」か、の問題を形式上はもっている。

しかし、この本質は「人間」とその生命を見る眼の問題ではないだろうか？

侵略された側の中国民衆を「人間」と見ず、その「人間の誇り」を見ることができなかった私たちや兄弟姉妹が、自分自身の人間性と誇りを失って行った事実を、私たちは再び忘れようとしている。「あなたたちはかつて人間である自分を忘れた。そして今再びその事実を忘れようとしている。それでよいのですか？」

教科書問題とは、かつて被征服状況の中で親兄弟を殺りくされ強姦され、しかも人間の誇りを失わなかった人々の胸の中に、数十年マグマのように燃えつづけていた炎の噴出ではなかったのだろうか？

私にはそう思えてならない。

私もこの本が出るころには五十歳になる。五十年という月日は早いものだ。

私の人生は一九四四(昭和十九)年九月二十六日に一度中断している。

中国東北地方(満州)鞍山市でB29の落した爆弾の直撃によって、私を含めて七人入っていた防空壕で六人が即死し、私だけが小指の骨折とかすり傷だけで命拾いをした。

もちろん全身打撲で失神し、私はその爆弾の落下を知らない。

私は三日間、医師もサジを投げた危篤状況を過ごし、三日目には失神からめざめ、一週間めにはケロッとして退院してしまった。

その時、私は母と姉を失った。

それは、植民地における虚しい生への一つの回答だったのだろう。私はそれに気づかなかった。

私は、それから敗戦と引揚げ、そして戦後から現在に至るまでの激動の時代を生きて来た。

どうしようもない劣等生の中・高時代、酒ばかり飲んでいた早稲田大学文学部学生時代、労組機関紙記者、社会新報記者、フリーライター時代を経て、歴史はめまぐるしく変った。三井・三池闘争、安保闘争、三里塚闘争、全国全共闘運動と激動の時代を経て、時代の閉塞状況を迎えた。

不変だと信じていたものも、強烈な突風が一瞬にバキバキッと建築物の屋根をひっぱがして去り、天井から天空が眺められるような変化を幾度も体験した。

この変化のすさまじさは、国家についての観念も自然に変えて行く。国家などというものは、私にとって少年時代には、一人一人の命を有無を云わさず奪う巨大な権能を有していたし、私たちの生は国家から与えられたもののような幻想の中にあった。

そのような死生観を私たち戦中の少年は根深く抱いて「美しいもの」と信じていた。

だが、その「美」はあざといまでにはげ落ち、醜惡な実態がむき出し始めた。

戦後、この死生観は恐ろしいほど変化した。

何が変化したか、と云って日本人の思想のなかで戦前、戦中、戦後を通じて、この「死生観」ほど変化したものはないだろう。

私は、この本に「戦争中の死」と「戦後諸情況の中の死」にふれる私のルポルタージュを集めた。集めた、というよりは、最近のルポルタージュを集めたら、日本人の諸状況の中の「死に方」を通じて、その生き方と状況が浮き彫りになるような、そんなルポルタージュばかりを自分が書いていた

ことに気づいた、というべきだろう。

なぜそうなったのだろうか？

濃淡のある生命

私は最近、人間の生には密度がある、と思うようになった。自分の人生を考えることは自分の生の密度を問うことではないか？ と。

人は、殊に若い人は問うかも知れない。

「生に濃淡があるのか？」と。

私は「ある」と答える。

「生と死は常に人の中で闘争し合っている。そして人の中で寸土を争い、互いに犯し合っているものなのだ。その生が死をいかに圧倒し去るのか、死がじわじわと生の領域を侵蝕するのか、によって人の生の濃淡は生じる」と。

現代の社会状況は、生と死がクッキリ対照をなしている戦争の時代とは異なる。

殊に管理社会とよばれる状況では「不可視の死」が人々を知らぬ間に包んでいる。

現象的には生きているが、生の領域を犯された死火山的人間。その人の心には氷柱が下がっている。現象的には勿論生きているが管理状況の中で沈黙する休火山的人間。その人の心も冷えた火山灰に埋もれている。

こうした生への死の侵略状況は、見えない細菌に犯される状況に似ている。現在の「平和」とはこうした不可視の戦争に包まれている。

少女の死が「判る」か？

これを書いている日も、三人の中学の少女が学校の屋上から飛び降り自殺をした。

読者、殊に若い読者は、この三人の少女の死を「判る!!」と思わなかっただろうか？

「判る!!」と思った人は、彼女らの死を具体的に説明できるだろうか？

新聞や報道は、彼女らの死を「全く原因がつかめない」と云い、「少女らの学校の先生も親も友だちも『全く心当りはない』と語っている」と書いている。

誰も、説明はできない。

しかし、私は、大半の友人たちには「判っている」のだと思う。

サラリー・ローンに追われて!! 失恋して!! そうした自殺は原因が（というよりはキッカケが）単一で因果関係がつかめる。

すると人々は、「あいつはサラリー・ローンの手先のやくざに脅されていたからなあ!!」とか「あいつは誰々さんのことを想っていたのに、誰々さんは別の人を愛していたからなあ!!」と説明して納得する。

だが、人々はこれらの自殺者の自殺に至るキッカケを説明したことにはなっても、判ったことには

ならないだろう。

「判った」ことと、「説明できる」こととは別なのだ。

少女の死は「説明」はできないが「判る」。

サラリー・ローンや失恋自殺者の死は「説明」はできるが「判った」ことにはならない。

こういうことが人の死の認識の上では充分にあり得る。そうは思わないか？

私なりにこの人の死に対する「判る」ことと「説明」できることの矛盾を分析してみよう。

サラリー・ローンに追われて自殺をした人(A氏)の場合、もしA氏が借金の上では苦勞していたとしても、他に自分が生きる上で充實したしごとや、張りのある役割を担っており、人々がA氏の役割を認識し、A氏と共に活動したり協力しつつ生きている、という状況があったら……と考えてみよう。彼はサラリー・ローンの苦と、それ以外の人生の張りとをハカリにかけ、死よりは生を選ぶだろう。もちろんA氏がそうした生き方をしていれば、サラリー・ローンに到達する前に、自分の経済問題を自力により、そして時には人々の協力の中で解決しているだろう。

つまり、サラリー・ローンも死も、彼の生の領域を犯さないことになる。

失恋のB氏の場合においても同様なことが言えるのではないか？

失恋が、彼の生の領域を叩いた時、彼の生の領域のあり方が、しなやかで強い豊かさに満ちていたなら、B氏は、その失った恋を美しい人生の一章として、生を豊かにする糧にさえ転化できるだろう。

つまり、A氏、B氏の自殺の説明として「サラリー・ローン」や「失恋」を当てはめて「説明」はできて、それは死のキッカケを語ったことにしかならない。

問題は、そうしたキッカケはこの世に充満していても、なぜ、A氏やB氏は、そのキッカケをはね返して、自分の生の領域に、死が侵入することを防ぐことができなかったのか？　というところにあるはしないだろうか？

若い君はどう思う？

つまり、私や君を包むこの世界の諸条件はあまりにも無尽蔵に「死へのキッカケ」「死を招く諸要因」に満ちあふれている。

それは恋愛―失恋などの心理的諸要因や、借金―貧困などの経済的諸要因、そして病気―災害や細菌など肉体的病理的諸要因として、重層的に日常の私や君をとりまいている。

チブスで死んだ、結核で死んだ、と説明されても、何も判ったことにはならない。チブス菌も結核菌もいつだって私や君のまわりをとりまいているからだ。

この場合、問題なのは、同じチブス菌、結核菌にとり囲まれながら、なぜC氏、D氏だけが死んだのか？　菌に対する耐性がなぜ弱かったのか？　彼、彼女の肉体的生命力はなぜ衰弱していたのか？　ということではないか？

A B C D諸氏の生命的主体の衰弱の原因こそが問題になってくる。

私が生には密度がある、と言ったのはこのことだ、ということは判ってもらえるだろうか？

死の要因は構造的に拡大した

「じゃ、学校から飛び降りた少女は、キッカケが判らないのに死んだ。きっと生命力の密度とやらが薄かったと高杉さんは言いたいのだろうか、まわりをとりまく諸要因との関係を説明できなくちゃ、判ったことにならないじゃないですか？ つまり、何がキッカケで彼女らは死んだのですか？」

それはそうだ。

しかし、死のキッカケにも、単一なものと複合的なものがある。

例えば「この世をはかなんで死んだ」という場合、この世という恐ろしく多元的諸要因が彼の死のキッカケとなるだろう。

「何もかもがいやになった」という場合、特にこれと言って単一のキッカケを見つけ出すことはできない。しかし、そういう心理は私にも判るし君にも判る。

複合汚染という状況のもとでの公害死に対して、加害者側が「じゃ因果関係を立証してみろ！」と居直ることができるのも、原因が複合的であり、単一の原因を特定できないからだ。確かに個別企業の責任は立証できないのだが、説明できないからと言って、産業構造の複合的責任がないということにはならない。

少女たちが、学校という現場を死に場所に選んだ意味は大きいと思う。

そのこと自体が、彼女らの死と学校教育は構造的につながっている、ということを彼女らは表現し

ているのではないか？

そして遺書も何も残さなかったのは、彼女らが複合的原因について「説明」できなかったから、だけなのではないか？

もし、彼女らが、自分の死の複合的要因について説明できたのなら、彼女らは死ななかった。彼女らはその要因に向かって起ち上がっただろう。

今や、単一の原因が死を招く時代ではなくなっている。

死のキッカケは複合的であり、多重的に個人に襲いかかる。教育現場にも死のキッカケは多重に増大している。環境の中の「何々の因子」が死因になるのではなく、環境そのものが複合汚染され、それ自体が構造総体として死因になるのだ。

君が彼女らの死について「判る」というのは、彼女らをとリまく複合的な死のキッカケとしての「教育」そのものの重圧について「判る」のであり、その死が彼女らの生の領域を犯したこと、すなわち、彼女らの生命的主体の衰弱について、君もその自らの生の領域を犯されている共通の体験者として「判る」のではないだろうか。

今は、人々の主体的生命の衰弱する時代なのであり、環境そのものが構造的に死の因子となっている時代なのだ。今は、人々が生きていると同時に、死に犯されている時代なのだ。環境構造をさらに複合的に捉えようと、国家構造が見えて来る。今は、人々が国家の不可視の殺意にとりかこまれている時代なのだ。